

## 司馬遷の見たる古代支那の人文地理について (二)

藤 田 元 春

### 四

一、古代文化の發祥地、然らば司馬遷はさうした地氣の若い關中盆地から出てきて、より古い時代の文化發祥地である河濟漯淮の中心部を歩きどういふ風に觀察し且之を記録したかといふに、司馬遷の河東、河内、河南といった古い帝都の地は、永い間の文化生活の結果として、人口が増加した。しかし増加しすぎて人情自から吝嗇になり、人々利に走つてやゝ頽廢的生活をする傾が見える」と論じた。即ち、

夫三河在天下之中若鼎足、王者所更居也、建國各數百千歲、土地狹少、民人衆、都國諸侯所聚會、故其俗織儉習事。

とのべてゐるのである。文章は簡潔であるが要を得てゐる。いかにも古い文化の土地の人は、織儉で、しみつたれである。江戸つ子か京阪の文化民をさして、上方贅六といつて笑ふやうな氣風になるものである。彼は殷の河内について曰く、

「中山は地薄く人衆し猶沙丘紂滌の地餘民あり、民俗懷急、起てば則ち椎剽に隨ひ、休めば則ち家を掘り、巧に姦治をなす、倡優女子となりて、中略遊媚するものあり、貴富なるは後宮に入る」

といふ工合で殷の都や、邯鄲などといふ處は人情がわるい。美男や美女の産地であり金持の子女は後宮に入るのだといふ。蓋し女子によつて富を求むるは、世上その例が多い、さうしてこの地方の民は巧妙に姦治して古器物の贖物をつくるといふのである。これはいかにも現在の支那人一流の特色とも見るべきもので、塚を掘つて古器を出す、又それに似た土器や銅器を巧につくつて、人をだますのである。筆者も嘗て南京で巧に作られた古土器を買はされた經驗がある。民俗性といふものは古來あまりかはらないものといへる。

しかしそれから北方の燕趙へゆくと土地が北であつて戎狄がせめてくる、地は邊にして胡の寇すること數であるから、人民は氣を好んで任侠の風がある。農商を事としない。よく支那の軍隊がやつてくるので、兵站に従事して時々大富を爲すものがある。其民羯鞞均しからず、全晋の時代からずつと慄慄であると記し、その結果趙でも燕でも、北方に領土をひらいた、中々強い油斷がならぬと論じてゐる。

しかし同じ河東でも魯(曲阜)や、梁(開封)に近いところにくくと、人情少しく變じて重厚となり浮華でないとのべてゐる。いかにもさうであつただらうと考へらるゝ説明であつて、我等はかうした記事をみて、現在の世界の文明國の人情といふものにも、類似の現象があるであらうことを疑はずに居れない。

いづれにしても文化の古いところから段々と離れて遠方にゆくと、土地が廣くなり人口が少い、自から人情もゆつたりする。さうしたところは漢代に二ヶ所あつた。一は山東の齊であり一は四川

の成都である。

司馬遷は齊について曰く

洛陽東賈、齊魯南賈、梁楚故、泰山之陽則魯、其陰則齊、齊帶山海、膏壤千里、宜桑麻、人民多文綵布帛、魚鹽、臨淄(齊の都)亦海岱之一都會也。其俗寬緩、闊達而足智、好議論。地重難動搖。怯於衆闘、勇於持刺、故多劫、人者大國之風也、其中具五民。

とのべた。蓋し泰山山地には當時猶森林もあり、濟渚の水利も盛んであつた、膏壤千里農業が盛んで物産も多かつた、又工業地でもあつた。故に齊都の民は寬緩闊達で議論を好んだ、孟子が齊宣王と談論したやうなものである、しかし既に文化が高くなつて衆闘に怯であるかはりに、刺客が上手である。大國の風があるといふところは面白いではないか、言論戦とか、宣傳戦とかいふことをやることの上手な國は、今日齊のみではない、歐洲にもざらにある。さうした土地には五民を具ふであつて、中國人の外に戎狄蠻夷、五方の族が移つてゐるといふのである。司馬遷は齊をのべたと同時に燕や趙が北方の棗栗の利を併せて勢のよいことをのべ、領土擴張の國運に對する好影響を見のがしてはゐなかつた。四川省については曰く、

巴蜀亦沃野、地饒卮(卮とは赤色のことで、リヒトホーヘンの赤色盆地といふことを、既に記してゐるのである)、

蓋丹沙石銅鉄竹木之器。南御滇僮、僂僮。西近功窄、笮馬、旄牛(地名)。然四塞、棧道千里、無所不通、唯襄斜縮穀(棧道のこと)。其口以所多、易所鮮。

即ち蜀の赤色盆地は物産が多く南は雲貴、西はチベットに通じ、棧道の嶮要の中に居る。多い物

産を以て、少ない所と交易する、まづかうした考で、蜀の富といふものをほめた、蜀の銅鐵の工業は古來有名であるが、漆器の如きも有名で、かの樂浪發掘の中の漢鏡には蜀の製造があり、又漆器の銘にも蜀の産が記してある。蜀は當時實に天下の工藝地であつた、故に巴蜀の宴婦である、清といふ女は丹を産する山を有し其富天下に歌はれてゐたと記してゐる。

二、楚 揚子江北、司馬遷は當時文化の進んでゐない楚については、之を三つの地理區にわかつて説明した、一は即西楚の湖北省で洞庭湖以北の地郢都(今江陵)は物産が豊富であるとのべ、二は中楚で湖北の北境淮山脈から北即ち陳の民は、文化圏から云へば中華と荆蠻との中間である、其民清刻にして己諾を矜るとしるし、第三の東楚といふは河南省東部の彭城より東海に至る所である。その俗徐僮胸繪に賴すといつてゐる。

蓋し彭城は今の徐州である、それから東は泰山山塊の南斜面で江蘇省である、徐僮といへば、周の時代徐偃王が亂をやつた國で、徐夷淮夷といつて東夷である、周の文化に従はなかつたものである。

司馬遷は之を實見してゐるから、江蘇省から河南省の南半部(陳)、又は安徽省から湖北省といふ、東南の土地は中華の文化圏外としたのである。故にその記事も亦簡單であつて、かの三河の地のごとく人多くして土地せまく人民の吝嗇に近いといふやうなことは書かないで、徐僮胸繪は北俗を以てすれば齊にひとしいとのみしるして、生活の樂であることをのべたのである。

かやうに考へると江蘇の南の方の吳や、越、もしくは江西省や湖南省といふものは全く文化圏内

に入らない、すべて百蠻の地である。傳説によると吳の太伯は周の王族で、南に走つて文身斷髮したものだといふ程であつて、もと／＼中華民ではない、それが今日の蘇州、上海である。又徐僮の東夷が周に従はないから、周公且は其子伯禽を魯に封じてこれが同化をはかつたといふ程であるから、この徐や淮は周代を通じて中華に反抗した。故に東夷といつたが、予はこの東夷の民が山東の民と共に朝鮮をへて、我日本の有史以前に移住したことを想像する。従つて日本文化の根元にこの殷周の高等な文化が徐淮の民を通じて移されてゐることを信じるものである。

以上は司馬遷の見た中國の最初の文化圏内である、さらに轉じて揚子江の下流(吳や越)や江南についてどういふ見方をしたか？

### 三、揚子江畔の古代 遷は曰く

楚越之地、地廣人希、飯稻羹魚、或火耕而水耨。果隋贏蛤、不待買而足。地勢饒食無饑饉之患、以故昔

蠶(意情である)、偷生無積聚、而多貧。是故江淮以南無凍餓之人、亦無千金之家。

沂泗以北宜五穀桑麻六畜、地小人衆、數被水旱之害、民好蓄藏、故好農而重民。

まづかういふ説明である、いかにも揚子江流域は文化が進まない、土地肥えて果隋贏蛤のごとき買を待たずして十分にある。森林をやいて畑とし、草地に水を灌いで田にする。稻を飯クラひ、魚を羹とする。あまりに生活が楽だから、なまけてしまつて、貯蓄心がない。この故に凍餓の民はないが千金の家がない、全く原始的であるといふのである、文化はさうした土地よりも、酷薄の地に起る同じ楚の地でも江蘇の北の泗水や沂水以北の民は五穀六畜を耕牧する、地小にして人が衆い、しばし

ば水旱をうけるから、人民が貯蓄する。農を好んで民を重んずる。即重農の國家となつてゐるといふのである。

予は司馬遷の人文地理の見解に同意したい。さうして、當時天下の富は陝西に集中したこと、やがてそこが王都になつた所以を理會する。

漢の文化はかやうにして三河の中央から、一旦は陝西にうつり、後に五胡十六國の亂をへて、揚子江畔にうつる、之を晋室の南渡といふ。爾來支那人は北方の強に對しては常に受身であつたが、しかし江南の開発に努力し、只今では江南は天下の富を集中し、支那の中の支那となり、猶嶺南の南海郡が、今日では獨立の中心になつたのである。

冷帯に發祥した文化は、かくて暖帯の中支那を支配し、やがて嶺南の熱帶地をも支配したのである。思ふにかうした支那文化の南進といふことは、やがて世界史の未開地開拓、又は植民發展の歴史の傾向に一致するものでなくてなんであらう。

四、氣候の周期的變化　司馬遷の人文地理の見解は上述したやうに文化圏の擴大といふことを前提としてのべられたのみでなく、内に於ては農業文化といふものを力説したから、自から氣候の變化に伴ふて發生する年の豊凶といふことに注意し併せてその豊凶による物價の變動といふ經濟事情を正視したものである、彼は農工商交易の路通じて、龜貝金錢刀布之幣起るとのべ、農が出さずんば食が乏しくなる、工が振はなかつたら事が乏しくなる、商人が出なかつたら衣食住にこまるとのべ、

虞不出則財匱少、財匱少而山澤不辟矣

と斷じた。虞とは山澤の林務官である、土地を開拓せずしては財匱少であるといふ。さうした考へから、衣食の原が大ならば、則饒かな生活が出来て、富國となり富家となる。管仲はこの方法によつて齊の桓公を相けて天下を一匡した。そこで倉廩充ちて禮節をしり、衣食たつて榮辱をしろのだと論じ併せて范蠡が富を致した理由は氣候の變化による年の豊凶を利したのだと説いてゐる。曰く

六歲穰六歲旱、十二歲一大饑、夫糶二十病農、九十病末、未病則財不出、農病則草不辟矣

とある。これは十二支の迷信かもしれぬがしかしブリュクナーの周期三十五、六年といふ期間に於て豊凶がある、その三分一の十二年に一たび大に餓ゆといふ事は必しも迷信ではない、太陽の黒點の周期は凡そ十一、二年であつて、其の周期の三倍がブリュクナーの周期である。十二歳一たび大に餓ゆといつた結論は、科學的研究の結果でなかつたとしても、少くともその數が太陽の黒點の周期に一致し、事實に於て黒點の變化が直ちに地上の氣候の長期にわたる變化に影響することが認めらるゝ今日、古い支那の人々の實驗的歸納の右の一句は、傾聽されてしかるべきであらう。もし不作になつて米價九十にもなれば商人がこまる。豊作で二十錢にも下れば農がこまる。高くとも八十を過ぎず。下つても三十錢に下らないやうに、米價の標準價格が一定するのは好ましいことである。故にもし豊作には盛んに之を買ひとつておく、凶作に之を賣つてもうけよとのべた。即米穀法案のやうな考が、この記事の中に出てゐるのである。予は司馬遷のこの論説によつて、漢代の經濟生活の高度に開展したことがわかると共に、米價の變動に注意したこの史記の説は恐らく永い間後世の政治家を教訓したことであらうと考へる。

一九三〇年以來小麥の世界的過剩が及ぼした結果とか、日本の絹糸の生産過剩の及ぼした結果などを併せ考へる時に、我等は史記の論説の中に今も猶新しいもの、多いことを感じる、以上を以て司馬遷の人文地理學の見識といふもの、大略を紹介し得たと考へるから之を以て擱筆する。

## 佐賀縣の自然地理

### 堀 米 次

#### 第一節 地形概観

佐賀縣の中央から稍北によつて聳え立つ筑紫山脈中の秀峰たる天山(海拔約一〇五〇米)に登つて一日の眺望を恣にする時、其處に展開される視界は實に本縣の最も主體をなす大部分である。東北遙かに背振山(一〇五五米)の靈山を望み、其間、北及び東部は主に花崗岩よりなる波浪形の山々が連互して本縣に於ける代表的山地を形成してゐる。天山の西なる視野には小巒起伏、丘陵に續くに丘陵を以てし、山林と水田或は畑地の交錯せるあり、此の一帶は概ね第三紀

層より成るのであるが、此單調を破るに處々に火山岩の噴出あり、それは自づと人文地理にも影響して複雑なる景觀を形成してゐる。眼を一度南方に轉ずれば、一望十里水田に續くに水田を以つてし、地表全く起伏なく、實に本縣の經濟活動資源の最も豊富なる地域を構成してゐるこの廣袤たる緑野の南に盡きるところ、有明の海あり。それを隔て、多良岳火山が聳えてゐるこれは精圓形の舊噴火口を中心にホマート型の美事なる火山地形を呈して、其裾野の遠く傾くあたり、本縣に於ける南部山地帯を構成してゐる